

正直に言うと、私は学校があまり好きではない。だけど、教科書は大好きだ。特に理科便覧や社会の資料集、英語の教科書が面白い。一ページ一ページめくるときに新しい発見があり、わくわくする。眺めているだけで、少し頭が良くなった気分にもなれる。

現在、私たちが使っている教科書は、各学年にあわせた内容で、写真やイラストも多く、カラフルで見やすいもの。二次元コードもついていて、デジタル化が進んでいる。以前、テレビドラマで見た昭和初期の教科書は白黒でイラストが少なく、文字ばかり。さらに、戦争という時代背景の影響で黒く墨で塗りつぶされたものもあった。見ているだけで、悲しい気持ちになってしまった。時代を経て、技術が進歩し、教科書が改良されてきた。それを見て、母は、「今の教科書は、エンターテインメント要素たっぷりできれいだね」とよく口にするぐらい、私にとって楽しい学習道具となっている。いつも何気なく使っているけれど、教科書は本屋にも売っていない特別なもの。そして、時代を反映する歴史の一部だと私は感じている。

そんな教科書が税金でつくられ、一人一冊しか配れないことを知ったのは、小六の社会授業だった。その中で、教科書が無償で一人の生徒に一年間で百万円近く使われていることを知った。あたりを見渡すと、学校は税金であふれていた。その税金は、国民一人一人が税金として納税しているお金ということに、とても驚いた。

いろいろと思いを巡らすと、税金は近い将来の日本を担う私たちへの投資で、私たちに期待と希望が込められている。教科書は、納税しているすべての人たちが私たちに学びの機会を与えてくれたもの。学校は社会に出るための入り口。そう考えると、両親親戚はもちろん、近所の人や会ったことのない人でも日本中の納税者に育ててもらっている気がする。「人生百年時代」の中の義務教育の九年間、短いかもしれないけれどその九年間のおかげで、子供たちの将来が明るくなり、社会に貢献できる人材に成長するのではないだろうか。つまり、「人財」を育てていると思ってほしい。

今回、この作文を書くまでは、税について深く考えることはなかったし、あまり良いイメージを持っていなかった。しかし、税について、知れば知るほど、多くのことが分かった。税金が私たちの生活を豊かにし、身近なところで役立っている事実こそが、子供たちの教育機会を拡大する必要な制度であることを。当たり前のように使われている税金が私たちの幸せを成り立たせていることに気づかなければ、いつまでも、税金の大切さや教育の意味を理解できないと思う。

そして、私は声を大にして言いたい。「明るい未来をつくるために納税をお願いします」と。